

松村和紀画集

— 幽境に咲く —

KAZUKI MATSUMURA

ご挨拶

この度、1989年制作の「華」から2018年迄の油彩画、その大作及び小品の中から71点を選び、作品集にまとめました。近作は日常を超えた幻想の華を描いています。幽境に咲く、華の世界。どうぞ御高覧の程、お願い致します。

—— 内なる生成とともに生きる ——

魂の根源には、永続する生成の力が在る。たとえこれを包む身体は有限であろうが……。新たに花の形を創り、探究する行為によって内なる生成の扉にノックする。生成なる永遠に触れるかの様に……。そこでは瞬く間に、日常の時を超えてしまう。

これまでの制作された作品の推移を眺めると、長い年月を経て幽境の荒れ野にいつの間にか咲き乱れゆく花々が描かれている。それはあたかも自然の生成力に追従してきたかのように思えてならない。花の新たな形態は、生成の象徴とでも云えようか。

花や木々の色彩と形を通じて、曲想を織りなす様に創る。そこではメロディアスな形を探索できる楽しみがあり、内なる生成と一つになれるのだ。

2017年9月25日
松村 和紀



1.『華』 油彩 F100号 162×130.3cm 1989年



2.『鳥』 油彩 S100号 162×162cm 1993年



3.『鳥』 油彩 F130号 162×194cm 1993年



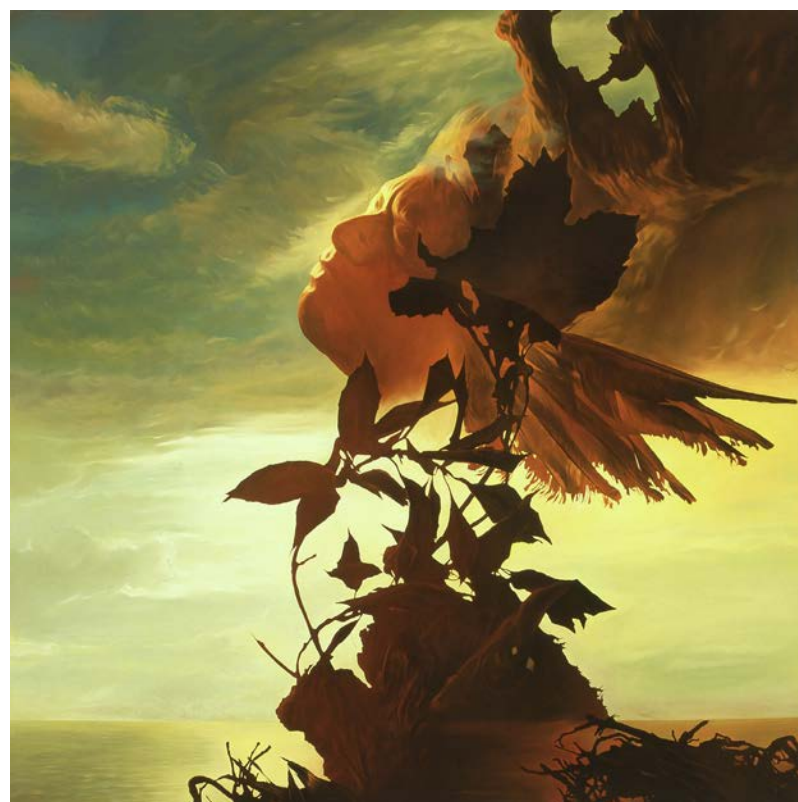
4.『暁の景刻』 油彩 S100号 162×162cm 1995年



5.『曉聲』 油彩 S100 号 162×162cm 1997 年



7.『嵐気』 油彩 S100 号 162×162cm 1997 年



6.『風の刻』 油彩 S100 号 162×162cm 1997 年



8.『光暉』 油彩 S100 号 162×162cm 1997 年



9.『石の聲』 油彩 S100号 162×162cm 1998年



11.『石の聲』 油彩 S100号 162×162cm 1998年



10.『夕陽』 油彩 F6号 31.8×41cm 1997年



12.『白月』 油彩 F6号 31.8×41cm 1997年



13.『風の碑』 油彩 S100号 162×162cm 1998年



14.『月影』 油彩 S100号 162×162cm 1998年



15.『天旭』 油彩 S100号 162×162cm 1998年



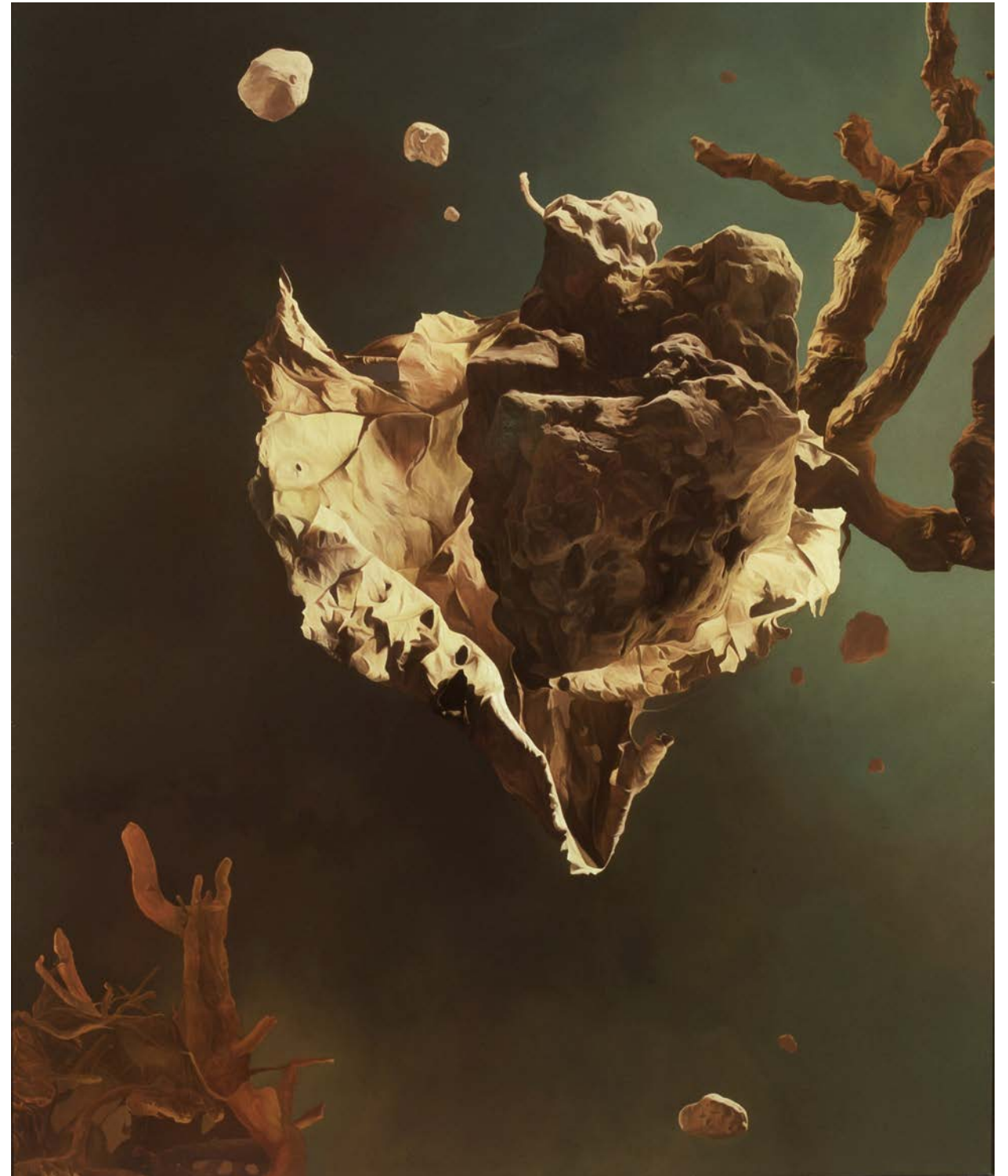
16.『荒地』 油彩 F100号 162×130.3cm 1998年



17.『石映』 油彩 F130号 194×162cm 1999年



18.『地久』 油彩 S100 号 162×162cm 2000 年



19.『昏冥の内に』 油彩 F130 号 194×162cm 2000 年



20.『地魄』 油彩 F130 号 194×162cm 2000 年



21.『落日』 油彩 F130 号 194×162cm 2001 年



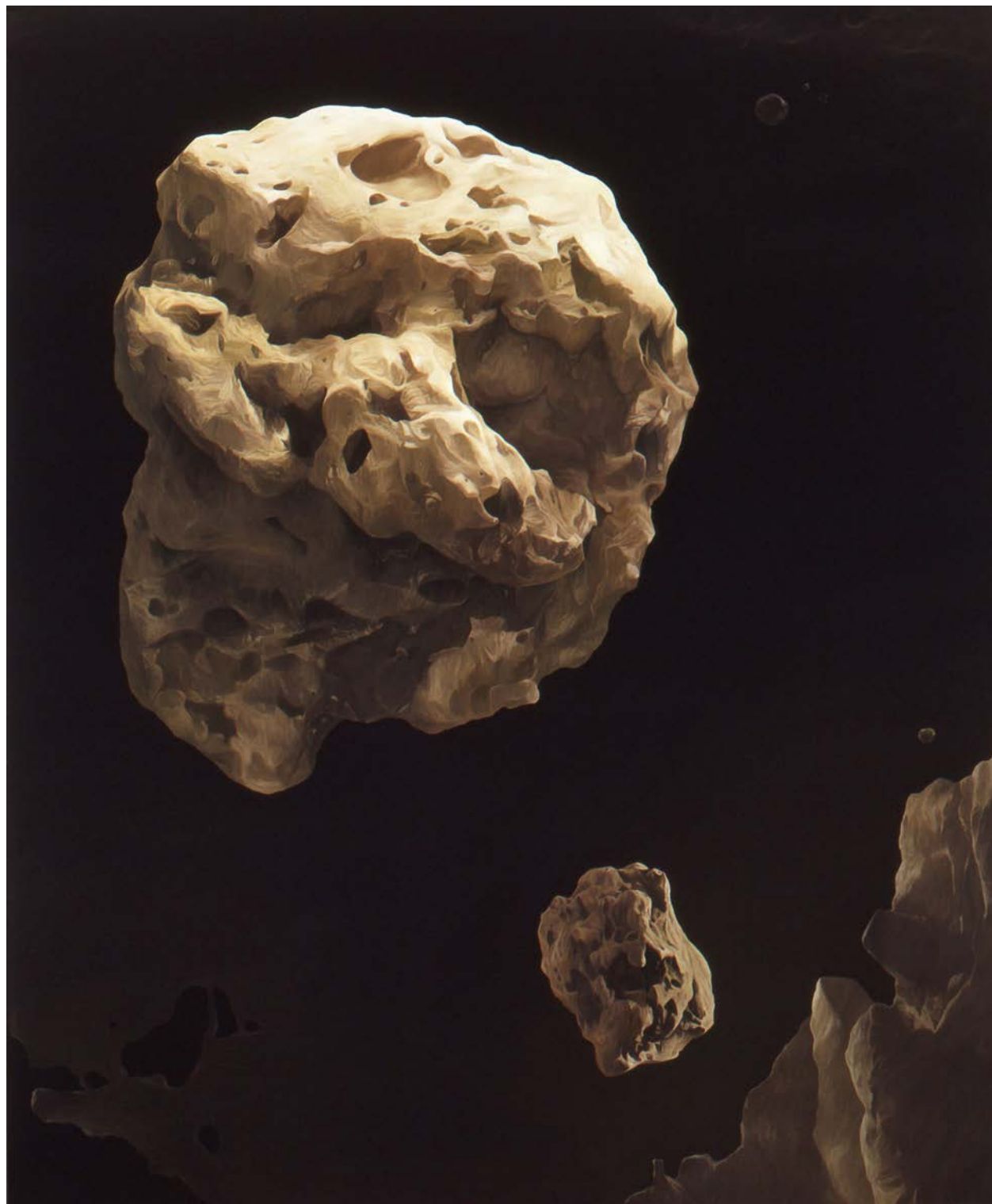
22.『夜明け』 油彩 F130号 194×162cm 2002年



23.『石映』 油彩 F130号 194×162cm 2003年



24.『石映』 油彩 F130号 194×162cm 2004年



25.『映像・夜の幽境』 油彩 F130号 194×162cm 2005年



26.『夜の幽境』 油彩 F130号 194×162cm 2006年



27.『影像·夜』 油彩 F130 号 194×162cm 2007 年



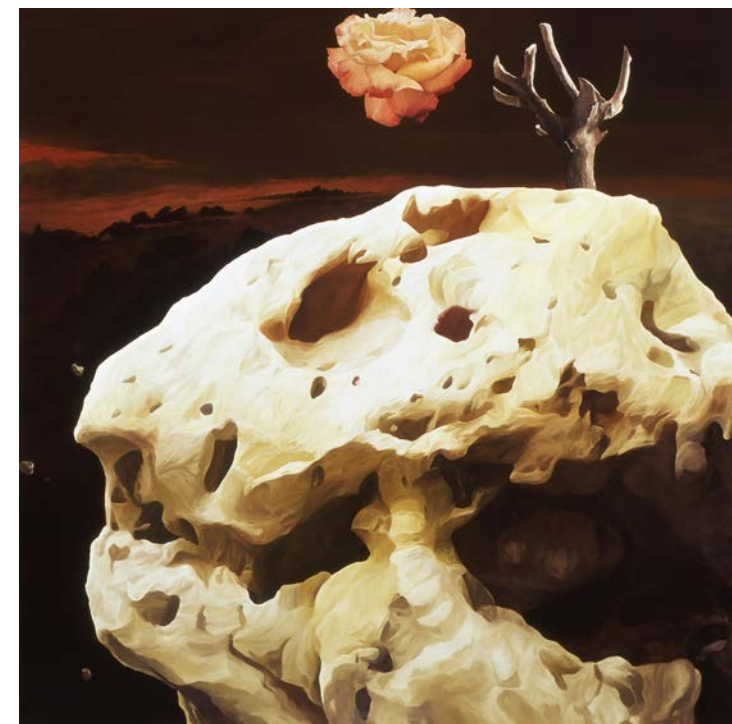
30.『幽境·夕景色』 油彩 F130 号 194×162cm 2008 年



28.『夕月』 油彩 F4 号 33.4×24.3cm 2009 年



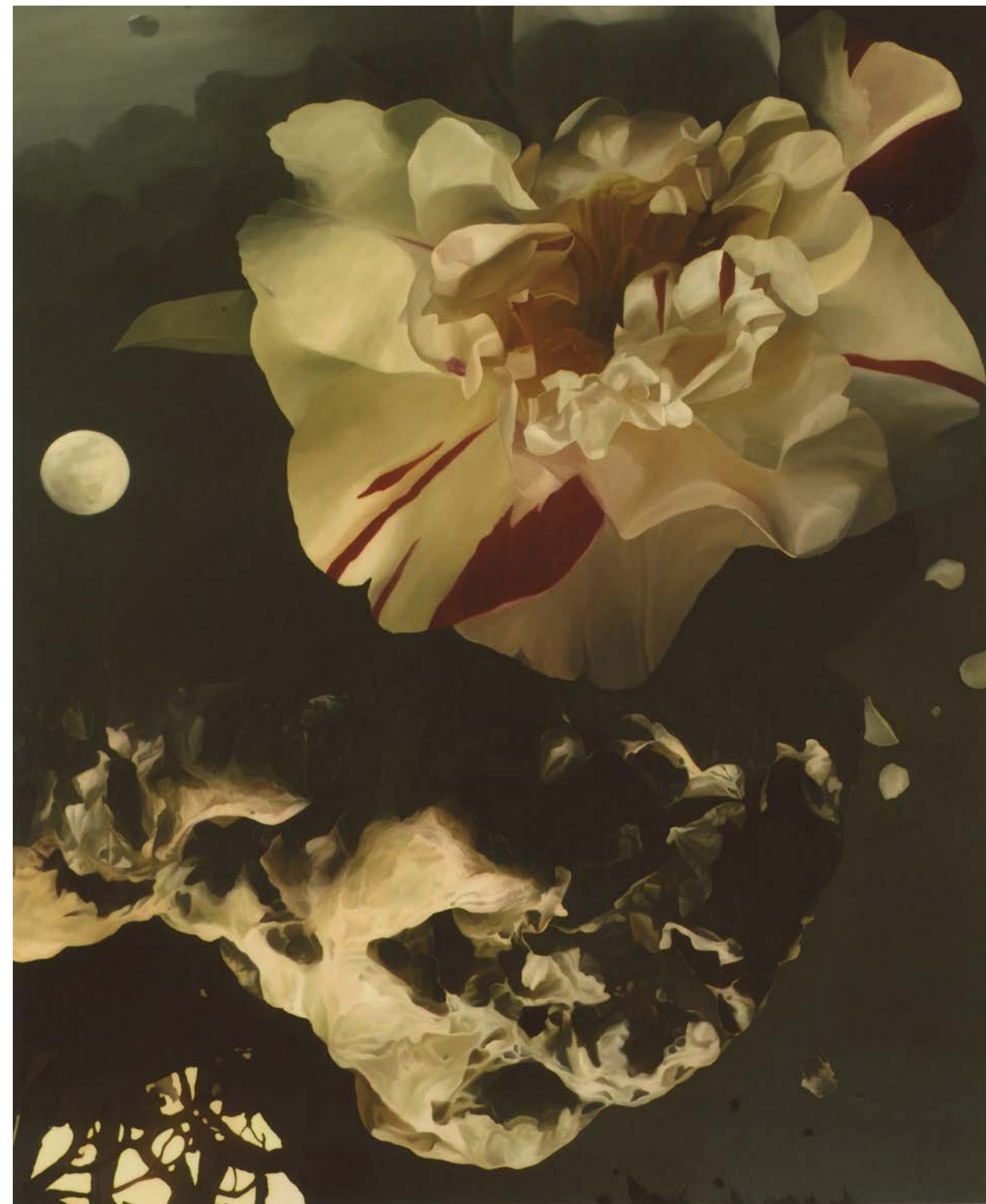
29.『曇天』 油彩 F4 号 33.4×24.3cm 2009 年



31.『陸』 油彩 S100 号 162×162cm 2009 年



32.『幽境・夕暮』 油彩 F130号 194×162cm 2009年



33.『幽境・夜の光』 油彩 F130号 194×162cm 2009年



34.『白月』 油彩 F100号 162×130.3cm 2010年



35.『幽境・明けゆく夜』 油彩 F130号 162×194cm 2010年



36.『幽境・暮れゆく』

油彩

F130 号

162×194cm

2011 年



37.『月景』 油彩 F100号 162×130.3cm 2011年



38.『夕影』 油彩 S100号 162×162cm 2011年



39.『月夜』
油彩
F3号
27.3×22cm
2011年



40.『日暮椿』
油彩
F3号
27.3×22cm
2011年



41.『夜明け』 油彩 F10号 53×45.5cm 2012年



42.『月夜』
油彩
SM
22.7×15.8cm
2012 年



43.『夜光』
油彩
F3 号
27.3×22cm
2012 年



44.『幽境・日暮れ』 油彩 F130 号 194×162cm 2012 年



45.『夜空』 油彩 F130号 194×162cm 2013年



46.『黎明』
油彩
F10号
53×45.5cm
2013年



47.『曙光』
油彩
F10号
53×45.5cm
2013年



48.『黎明』
油彩
F10 号
53×45.5cm
2014 年



49.『夜』
油彩
F30 号
91×72.8cm
2013 年



50.『黎明』 油彩 F130 号 194×162cm 2014 年



51.『夕映え』 油彩 F100号 162×130.3cm 2014年



52.『陽光』
油彩
F100号
162×130.3cm
2014年



53.『夜風』 油彩 F6号 31.8×41cm 2014年



54.『夜空』 油彩 F30号 91×72.8cm 2014年



57.『夜に咲く』
油彩
F30号
91×72.8cm
2015年



55.『明けゆく』 油彩 F3号 27.3×22cm 2015年



56.『暮れ泥む』 油彩 F3号 27.3×22cm 2015年



58.『夜花』
油彩
SM
22.7×15.8cm
2015年

59.『明けゆく闇夜』
油彩
F130 号
162×194cm
2015 年





60.『暮れ泥む』 油彩 F6号 41×31.8cm 2015年



61.『曇り空から』
油彩
F10号
53×45.5cm
2015年



62.『朝明け』
油彩
F20号
72.8×60.6cm
2016年



63.『夜光』
油彩
F3号
27.3×22cm
2015年



64.『朝明け』
油彩
F130 号
162×194cm
2016 年



65.『灯』
油彩
F20号
72.8×60.6cm
2017年



67.『明け空』
油彩
F20号
72.8×60.6cm
2017年



66.『明けゆく夜』
油彩
F6号
41×31.8cm
2017年



68.『月夜』
油彩
F50号
116.7×90.3cm
2018年



69.『黄昏』 油彩 F50 号 116.7×90.3cm 2018 年



70.『花景』
油彩
F0 号
18×14cm
2018 年



71.『灯』
油彩
F4 号
33.4×24.3cm
2018 年

存在の絶対性への疑義

美術評論家
中野 中

松村さんの作品は、彼が発表の主舞台にしている国展（国画会展）で見続けて知ってはいたが、本人とは面識がなかった。そこでこの稿を書くに当たってとにかく会おうということで、国展関係の準備に大阪から上京中の慌ただしい中、上野の喫茶店で一時間ほど話をすることができた。その折に得た資料を借りながら、彼の作品とその背景に触れたい。

松村は大阪市に生まれた。父は京都府出身で、大学附属図書館事務長を務める傍ら、1970 年頃に二元会創立会長の鈴木博尊に師事、同会に所属し油彩画を嗜んでいた。また母の叔父は日本画家西岡花溪で、その掛け軸と、油絵を描く父の姿を見ながら幼少期を過ごした。後年画家の道へ進む環境はすでに用意されていたようである。ブラック、タンギー、キリコ、ダリ等、シュルレアリスム系の画家の作品に触れ、またドイツの作曲家ヒンデミット（1895 ～ 1963 年。第一次世界大戦直後、新即物主義を旗印に、音そのものの動きの喜びを中心とした作風で、当代の代表的作曲家となった）の交響曲「画家マチス」に深い感銘を受けた。

いつしか油彩画を描くようになり、地元の市立工芸学校の美術科に進み、1982 年武蔵野美術大学の油絵専修を卒業。85 年にはフランス、スペイン、ポルトガルを巡り西洋絵画の風土と作品に直に触れる機会を得た。

その後〈幽境〉をテーマに、幻想的な心象風景を描くに至るのだが、大きな転機になったのは阪神大震災（1995 年）であったであろう。枯木の立つ荒蕪地と石塊の浮かぶ昏明の宇宙空間が登場するのはこれ以降に見られる顕著な傾向である。このモチーフがしばらく続いた後に、今に続く〈花〉が主役を占めるようになる。

〈幽境〉がタイトルに現れるのは、2005 年の「映像・夜の幽境」からのようである。第一画集『幽境に咲く』の中に、発表時点で、誌紙に求められて筆者が寄せた寸感が紹介されている。重複するが、ここにも引用させていただく。

「幽境・明けゆく夜」（F130、2010 年）

——闇から薄明へ、刻々と夜が明けゆく時、心気は澄まされ、何かしら聖なる思いに満ちるのかもしれない。静寂の夜から来たる新しい一日の始まりへと流れる時間に沿って、心もしだいに明るさに満ちてくる。それは幻想性と神聖な思いを綯い交ぜにしながらも…。心の時空の変容を象徴的に表現している。——

「幽境・暮れゆく」（F130、2011 年）

——〈幽境〉とは辞典的には、静かで俗気の無い場所を意味する。元々〈幽〉には、隠れる・潜む・暗い・深く遠い・微か・あの世、などの意味合いがある。明快ではない、捉えにくい、わかりにくい、言い難い状況である世界なのであろう。これこそ絵画で捉えるしかないし、であれば必然的にそれは神秘的であり幻想的になろう。

松村は宇宙を舞台に、石塊や枯木、花、月を素材に、時空間を構成する。優れた描写力と明確なモチベーションは、無音の無重力世界に明確なフォルムとリアリティを登場させて、しかしそれでいてどちらかが実体で何が無なのか、時に逆転する錯視を孕みながら、幽明境の明らかならざる世界に斬り込んでいく……。——

さて、松村の近・新作は〈花〉が主役となりつつある。今春（2018 年）の第 92 回国展の「黄昏」ともう一点も花であり、花が画面いっぱいを占めて花開いていた。〈花〉は以前からよく描かれているが、その頻度を増したのは先の大震災以降である。そこには救いや希望の意味合いがあろう。であるからして当然明るい明彩色を伴うが、ときに暗鬱な虚空を背景としても登場する。それにしてもこの〈花〉が曲ものであって、バラのようでいてそうではなく、百合のようであってそうではない。松村の創作なのである。

この〈花〉は何の花と措定する意味はない。おそらく石塊でも枯木でも月でも構わないのではないか。そう思う故か、鮮やかに咲く花に陰りが見え隠れし、確かにそこに在るのだが、生命（肉体）感の奥に虚無的な匂いも感じられるのだ。これは松村の宇宙感や死生観による世界観によるもので、存在の絶対性に常に疑義が呈されている。宇宙の無限と有限、霊性と肉体の、あるいは生と死の背中合わせ。明の陰りと暗影の抱える美しさ……等々、矛盾だらけの世界。絶対などあり得ない現実。そんな身で何が出来るのか。絵を描く、描画を通して目に見えないアイデアとして超越的な未知の領域に斬り込んでゆく。

それが画家松村和紀の、一貫する画業である。

無限と有限 相互の反転現象

(株) アートラボ美術事業部 主任
渡水 理

松村和紀氏の作品に私が見るのは、無限と有限相互の反転現象である。

無限は宇宙。空間は底知れぬ広がりがあり、歴史は何十億年も続き、さらに今後も果てしなく続く途方もない時間がある。

絵画は、無限なる宇宙を有限に変えることが出来る。絵画には“枠”がある。フレーム内という限り有る空間が表現の場であり、宇宙も例外でない。際限なき宇宙は枠内に収まる有限な世界になる。松村氏の作品も背景は空を連想させることが多い。近年の作品は花の背景に月が浮かぶ暗い空間があり、宇宙を連想させる絵が少なくない。有限に変わった宇宙を背景に、主題である花が踊るのが氏の作品であると感じる。

有限は生命。限り有る寿命を与えられ、その中でしか生きる時間を与えられない存在。氏の作品で頻繁に登場する花は、象徴的な存在であると感じる。

花は極めて写実的に描写され、写真と見間違うほどに精緻に描かれる。同時に常識を覆し、現実離れした姿を見せる。花卉の色は薄いピンクを基調としつつ、時にはそこへ深紅や青の花弁が混ざることもあり、凡そ現実では考えづらい組み合わせの時が有る。

花の構造も、本来有るはずの葉が無ければ茎も無く、本来有るべき根が無ければ根をはる土も無い。更には宙を舞うような躍動感を見せ、その姿は花卉と言うより翼であり、澄んだ色合いは天使のような聖なる色にうつる。生き生きとした姿は内包する心情を描写したような詩情に満ちる。

進化理論、生命の原理、重力などの物理法則。

“生ある者”を有限に制約するあらゆる条件から解放し、その心情を感情へ開花させ、情景を極めて写実的に描写する。まるで“聖なる者”が現実に見れたような澄んだ光景に見え、圧倒的な美しさがある。

私達は限られた寿命を生きる有限な存在だが、同時に2つの無限を持っている。

1つは感情や心情と言った内面である。いかようにも色づき、際限のない変化、広がりを持てる。心は宇宙である。もう1つは表現である。心情という内宇宙を、外面へ表出させる。その方法に制約はなく、いかように変化することも形を創ることも許される、自由と言う名の無限が有る。

松村氏は心情と言う内宇宙を花というモチーフで表現し、有限であるはずの生命体が絵画の中では無限な存在へ生まれ変わる奇跡を見せているように考える。

羽ばたくような姿は変幻自在に作品ごと形を変え、無限と言う言葉が相応しい存在に、一方背景となる空や宇宙は、その広がり枠内に規定される有限な空間に変わり、“有限から無

限に変わった花”“無限から有限に変わった宇宙”が1つの画面に収まることで対比の構造が生まれ、花は存在感を際立たせる。氏は際立った存在感を極めて緻密に、写実的に画面の中へ息づかせ、幻想的であるはずの光景が実景として目の前に存在しているかの感覚に陥り、言葉に出来ない程の力を感じる。

内面という宇宙の写実化、真実の現実化。

有限と無限の逆転が、目に見えないはずの精神を具現化し、圧倒的な技術を持って画面に定着させることで、幻想的な光景を現実以上の実感にもたらししていく。

内面と言う名の宇宙が、目に見える宇宙以上に感じられる芸術性。

精神と表現、2つの宇宙（無限）が掛け合わされ現実を凌駕する光景となる、それこそが私の感じる松村氏の“幽境”である。

松村 和紀 作品一覧

No.	題名	技法	号数	寸法	制作年
1.	華	油彩	F100 号	162×130.3cm	1989 年
2.	鳥	油彩	S100 号	162×162cm	1993 年
3.	鳥	油彩	F130 号	162×194cm	1993 年
4.	暁の景刻	油彩	S100 号	162×162cm	1995 年
5.	暁聲	油彩	S100 号	162×162cm	1997 年
6.	風の刻	油彩	S100 号	162×162cm	1997 年
7.	嵐気	油彩	S100 号	162×162cm	1997 年
8.	光暉	油彩	S100 号	162×162cm	1997 年
9.	石の聲	油彩	S100 号	162×162cm	1998 年
10.	夕陽	油彩	F6 号	31.8×41cm	1997 年
11.	石の聲	油彩	S100 号	162×162cm	1998 年
12.	白月	油彩	F6 号	31.8×41cm	1997 年
13.	風の碑	油彩	S100 号	162×162cm	1998 年
14.	月影	油彩	S100 号	162×162cm	1998 年
15.	天旭	油彩	S100 号	162×162cm	1998 年
16.	荒地	油彩	F100 号	162×130.3cm	1998 年
17.	石映	油彩	F130 号	194×162cm	1999 年
18.	地久	油彩	S100 号	162×162cm	2000 年
19.	昏冥の内に	油彩	F130 号	194×162cm	2000 年
20.	地魄	油彩	F130 号	194×162cm	2000 年
21.	落日	油彩	F130 号	194×162cm	2001 年
22.	夜明け	油彩	F130 号	194×162cm	2002 年
23.	石映	油彩	F130 号	194×162cm	2003 年
24.	石映	油彩	F130 号	194×162cm	2004 年
25.	影像・夜の幽境	油彩	F130 号	194×162cm	2005 年
26.	夜の幽境	油彩	F130 号	194×162cm	2006 年
27.	影像・夜	油彩	F130 号	194×162cm	2007 年
28.	夕月	油彩	F4 号	33.4×24.3cm	2009 年
29.	曇天	油彩	F4 号	33.4×24.3cm	2009 年
30.	幽境・夕景色	油彩	F130 号	194×162cm	2008 年
31.	陸	油彩	S100 号	162×162cm	2009 年
32.	幽境・夕暮	油彩	F130 号	194×162cm	2009 年
33.	幽境・夜の光	油彩	F130 号	194×162cm	2009 年
34.	白月	油彩	F100 号	162×130.3cm	2010 年
35.	幽境・明けゆく夜	油彩	F130 号	162×194cm	2010 年
36.	幽境・暮れゆく	油彩	F130 号	162×194cm	2011 年
37.	月景	油彩	F100 号	162×130.3cm	2011 年
38.	夕影	油彩	S100 号	162×162cm	2011 年
39.	月夜	油彩	F3 号	27.3×22cm	2011 年
40.	日暮椿	油彩	F3 号	27.3×22cm	2011 年

No.	題名	技法	号数	寸法	制作年
41.	夜明け	油彩	F10 号	53×45.5cm	2012 年
42.	月夜	油彩	SM	22.7×15.8cm	2012 年
43.	夜光	油彩	F3 号	27.3×22cm	2012 年
44.	幽境・日暮れ	油彩	F130 号	194×162cm	2012 年
45.	夜空	油彩	F130 号	194×162cm	2013 年
46.	黎明	油彩	F10 号	53×45.5cm	2013 年
47.	曙光	油彩	F10 号	53×45.5cm	2013 年
48.	黎明	油彩	F10 号	53×45.5cm	2014 年
49.	夜	油彩	F30 号	91×72.8cm	2013 年
50.	黎明	油彩	F130 号	194×162cm	2014 年
51.	夕映え	油彩	F100 号	162×130.3cm	2014 年
52.	陽光	油彩	F100 号	162×130.3cm	2014 年
53.	夜風	油彩	F6 号	31.8×41cm	2014 年
54.	夜空	油彩	F30 号	91×72.8cm	2014 年
55.	明けゆく	油彩	F3 号	27.3×22cm	2015 年
56.	暮れ泥む	油彩	F3 号	27.3×22cm	2015 年
57.	夜に咲く	油彩	F30 号	91×72.8cm	2015 年
58.	夜花	油彩	SM	22.7×15.8cm	2015 年
59.	明けゆく闇夜	油彩	F130 号	162×194cm	2015 年
60.	暮れ泥む	油彩	F6 号	41×31.8cm	2015 年
61.	曇り空から	油彩	F10 号	53×45.5cm	2015 年
62.	朝明け	油彩	F20 号	72.8×60.6cm	2016 年
63.	夜光	油彩	F3 号	27.3×22cm	2015 年
64.	朝明け	油彩	F130 号	162×194cm	2016 年
65.	灯	油彩	F20 号	72.8×60.6cm	2017 年
66.	明けゆく夜	油彩	F6 号	41×31.8cm	2017 年
67.	明け空	油彩	F20 号	72.8×60.6cm	2017 年
68.	月夜	油彩	F50 号	116.7×90.3cm	2018 年
69.	黄昏	油彩	F50 号	116.7×90.3cm	2018 年
70.	花景	油彩	F0 号	18×14cm	2018 年
71.	灯	油彩	F4 号	33.4×24.3cm	2018 年

松村 和紀 P R O F I L E

1959 年 大阪府生まれ
1982 年 武蔵野美術大学 別科実技専修科油絵専修卒
1983 年～ 国展出品
所属 元国画会会員（2018 年度迄所属）

□個展
2001 年 大阪府立現代美術センター
2011 年 Gallery EDEL
2013 年 Gallery 菊
2015 年 ギャラリー Create 洛
2016 年 近鉄上本町店 8 階アートギャラリー

□グループ展
2012 年～ 毎年 第 30 回記念京都新聞チャリティー美術展（京都高島屋 7 階）
2013 年 大阪支部 国画会会員 8 人展（ギャラリー菊）
2013 年～ 2018 年 国画会会員・国画 1 3 の視線展（銀座ギャラリー向日葵）
2017 年 「花を描く 3 人展」 近鉄奈良店 5 階美術画廊
「花を描く 3 人展」 近鉄和歌山店 5 階美術画廊
「花と静物を描く 3 人展」 京阪守口店 6 階美術画廊
秋の美術工芸展 近鉄奈良店 5 階美術画廊
2018 年 Osaka Art Fes 2018 阪神梅田本店 8 階催場

□アートフェアー
2012 年～ 2018 年
ART INTERNATIONAL ZURICH

□受賞
1982 年 武蔵野美術大学 優秀賞
1995 ～ 96 年 関西国展国画賞
1998 年 国展国画賞
1999 年 京都美術工芸展 優秀賞

□掲載文献資料
1995 年 現代の絵画 創刊号 [朝日出版社]
2009 年 日本の四季・秋冬 [美術年鑑社]
2011 年 BIFROST VOL.14 巻頭特集 [アートクロス]
2013 年 新美術新聞 公募展 第 87 回国展「夜空」
2014 年～ 現代人気美術作家年鑑：カラー図版掲載
2015 年～ 美術年鑑：カラー図版掲載作家
2016 年 新美術新聞 公募展 第 90 回記念国展「朝明け」
現代人気美術作家年鑑 公募展 第 89 回国展「明けゆく闇夜」
2017 年 新美術新聞 公募展 第 91 回国展「明け空」
現代人気美術作家年鑑 公募展 第 90 回国展「朝明け」
2018 年 新美術新聞 公募展 第 92 回国展「黄昏」
月刊美術 8 月号第 92 回国展（絵画部）レビュー「黄昏」

□収蔵
1984 年 大阪外国語大学（現大阪大学）記念会館
1987 年 大阪外国語大学附属図書館（現大阪大学外国学図書館）

松村和紀画集
—幽境に咲く—
（電子書籍版）

定価（本体550円+税）

2019年2月4日初版第1刷発行
著 者 松村和紀
発行者 百瀬精一
発行所 鳥影社 (www.choeisha.com)
〒160-0023 東京都新宿区西新宿3-5-12 トーカン新宿7F
電話 03-5948-6470, FAX 03-5948-6471
〒392-0012 長野県諏訪市四賀229-1(本社・編集室)
電話 0266-53-2903, FAX 0266-58-6771
© MATSUMURA Kazuki 2019 printed in Japan
ISBN978-4-86265-731-2 C0071